

段物

府中心中口説き

ここに珍し心中ばなし
所いずこと尋ねて聞けば
府内様なる御支配うちで
町で聞こえた油屋問屋
歳は二十一、若いし盛り
凡そ近所に並びもないが
親の資産に目をかけなくて
女見かけの商いなれば
日毎日毎の商いなれど
思い通れば片島へんの
二番娘のおりつと言うて
ツツジ椿は岩山照らす
手もの縫針お機(はた)の道も
これが伝次郎の目についた娘
縁が来たのか日の入会に
しかと手を取りこれおりつどの
晴れた月夜も の一闇となる
言えばおりつはその手を払い
あなた萩原名所の生れ
田舎者なら薄いも恋も
聞いて伝次郎、腹立顔で
靡くまいとはそりやとつよくな
水にもまれた川端柳
いやな泥水でも出てくりや靡く
言えばおりつは気の毒そうに
起請なされよ誓詞をなされ
腰に指したる矢立を取りて
変わるまいとの誓詞をなさる
その後伝次郎折ふし通う
親の決めたる嫁入りなれど
わたし嫁入りすること出来ぬ
その夜伝次郎が忍んだ時に
連れて逃げるか心中するか
いつそ色よく心中しよう
遙か離れた千小松原

未熟乍らも読み上げます
それは豊後の府中の城下
殊に名高い萩原の町
一人息子の伝次郎さんは
弾くそろばん読み書き等も
されど伝次郎奇特な生まれ
一人元手の商いなさる
小間物背負て村々廻る
これと言うような女もないが
村で名代の御百姓の
歳は十九の今咲く花よ
花のおりつは片島照らす
凡そ近所に並びもないよ
いつかどうぞと折ふし思う
廻る木陰でおりつに出会う
そなた思うにや照る日も曇る
晴らし下されこれおりつさん
何を言わんす伝次郎さんよ
わたしや片島田舎の育ち
恋の道ならわしや知りませぬ
人に大事を語らせ乍ら
物のたとえで口説くじやないが
ホタル一夜の情けも御座る
どうぞござんす の一おりつどの
さほどあなたが御傷心ならば
そこで伝次郎渡りに舟と
二世も三世も又先の世も
そこでその夜は色よく別れ
いつか月日も過ぎ去りまして
おりつ貰われ頼めを受ける
誓詞交わした男がござる
おりつ伝次郎に相談なさる
連れて走れば追手がかかる
心中どころは何処といえば
松栄山とて小高きお山

その夜のおりつの死出装束は
裾は白足袋、八尾雪駄(やおせった)
三尺一寸落しに差して
急ぎ急いで松栄山の
そこでおりつが伝次郎に継り
夜明けガラスがもう鳴きだした
西に向かつて南無阿弥陀仏
三尺一寸すらりと抜いて
返す刀で我が身を突いて
町の若い衆、他村のお客
余り深うなりや命にかかる

三重と廻して蝶々で止めて
伝次郎その夜の死出装束は
おりつ手を取り忍んで出でる
山の弥山(みせん)に早着きました
これさ伝さん伝次郎さんへ
早く死なぬと夜が明けまする
そこで伝次郎涙を払い
下ろす刀でおりつを斬つて
遂に二人は相果てました
恋はするとも水色薄く
余り深うなりや命にかかる